The Japanese Society of Social Psychology

社会心理学研究　第11巻第2号
1995年，105-115

いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差

坂　西　友　秀（埼玉大学教育学部）

Long term effects from bullying on a victim and the differences between the victim's self-perception and the victim's perception of other victim

Tomohide BANZAI (*Faculty of Education, Saitama University*)

This study has the following two aims. First, it is aimed at investigating the effect of a victim's coping style with bullying with regard to resolving bullying problems. Second, it is aimed at exploring long term effects of bullying on a victim. The main results of the first part of this study were as follows:

1. The active reaction of victim's to the assailant increased the rate of improvement or complete resolution of the bullying problem. When a victim asked somebody (for example, his/her school mates, family, teacher, or all of the above) to help, the results indicated improvement or complete resolution. However, no resistance by a victim increased the possibility of continuing bullying.

2. Bullied experiences have long term influences on a victim in various ways such as physical, active, social, and psychological.

In the second study, the victim's self-perception and his/her perception of other victims concerning the long term influence of bullying were compared. The victim's self-evaluation was significantly smaller than his/her evaluation of other victims. These results were analysed from victim's defensive attitude, and differences in perception between actor and observer.

Key words: lasting influences, university students, bullying, self-other perception, victim
キーワード：長期的影響、大学生、いじめ、自己・他者認知、被害者

最近では、いじめは小学校の子どもたちの間にさえも広がっている。例えば、1992年度の全国の公立学校のいじめの発生件数は、全体に占める割合で見ると、小学校12%、中学校33%、高等学校24%である（文部省初等・中等教育局，1993)。最も深刻な事例では、いじめを受けた生徒が自殺をしたり、仲間によって殺されたりする（金，1981, 1983, 1984；亀田・亀田，1990，森田，1985)。1対1のいじめは少なく、多くの場合いじめる側の生徒はグループを形成し、1対多のいじめになる。そして、いじめられる生徒は、毎日仲間からの言語的、身体的ないやがらせに曝されるのである。通常いじめは教師や親の見ているところでは行われないので、そのいじめが実際どれだけ深刻であるか教師や親が知ることは少ない（土屋・土屋，1993)。このように表面化しにくいところに、いじめられる生徒にとってのいじめの深刻さと、教師や親や周囲の仲間の対処の難しさがある。

ここでいじめはどのような特徴を持ち、からかいやけんかとどのように違うのかを見ておこう。詫摩(1985)は、三者を次のように区別している。からかいは、ひとりが夢中になってやっていることに、それが無意味、無価値であるといってみたり、そのものの弱点や恥ずかしいと思っていることを指摘して、そのものを失望させたり混乱させてしまうものである。また、けんかは自分と相手の主張、要求、利害が相入れず、怒りの感情をもって、一方が他方を攻撃し、他方がこれに応ずるか、あるいは両方が同時に攻撃し合ったときに生ずるものである。同じ相手とたびたび争うことはあるが、一度のけんかは数分程度でけりがつく。これに対して、いじめは、一方が他方より力の上で優位であったり、複数対一人であったりする。いじめの特色はこの強い立場にあるものが弱い立場にあるものを圧迫し、そのものが困惑し、苦しみ、いやがる様子を喜ぶということにある。弱いものの方に争ったり対抗しようとする意欲がまったくなく、むしろ逃げようとしているのに、それをつかまえて嫌がる姿をおもしろがる残忍さがある。けんかが一過的で単純で、乾いた面があるのに対して、いじめは暗く、しつこく、陰湿な面がある。

このように定義したからといって、いじめをからかいやけんかと常に明確に区別できるわけではなく、時には軽い気持ちでのからかいが，いじめやけんかに変化していくこともある。また何をもっていじめと考えるかは、当人の主観によるところが大きい。つまり、外部の人はからかいだと見る行為であっても、当人が心理的・身体的苦痛を感じ、いじめであると受けとめるなら，それはいじめになる。本研究では、いじめを詫摩にそって定義することにするが、いじめであるか否かは，当人の主観的判断に依存するものとして考えることにする。なお、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

いじめる生徒を加害者、いじめられる生徒を被害者とも呼ぶことにする。

いじめは、1対集団で行われることが多く、被害者は仲間から孤立しやすいことが、明らかにされている（金, 1981, 1983, 1984)。さらに被害者は加害者に逆らったり対抗する意欲が弱いことが、いじめの一つの特徴であるといわれる。いじめられる事態から脱するためには、級友との人間関係を作り出し、孤立状態を解消することが必要である。級友といじめ問題を共有することは、潜在していたいじめを顕在化させ、周囲の生徒が公の問題として対処しやすくさせるであろう。同様のことは、被害者の教師への援助の求めについても当てはまると思われる。なぜならば、被害者がいじめの実態を教師に話すことによって、教師がいじめに気づき、その実態を知ることになり、それを解消するための対処を生み出しやすくすると考えられるからである。それに対して、被害者が加害者のなすがままになり、いじめに消極的に対応し積極的な対処行動をとらない、ないしはとれない場合には、孤立が深まりいじめが解消することは少なくなると考えられる。

これらのことから、被害者が友達あるいは教師にいじめについて援助を求めることは、その後のいじめの解消と強い関係があると予想される。逆に、誰にもいじめについて援助を求めないことは、いじめの未解消・継続と強い関係があると予想される。この点の検討を本研究の目的の一つとする。

ところで、いじめは、被害者の対処によって途中で解消するしないにかかわらず、被害者に何らかの身体的・精神的影響を及ぼすであろう。今まで、いじめの被害者への影響は、その渦中にいる時、あるいはいじめを脱した後の短期間に焦点を当てた研究や報告が行なわれることが多かった（竹村・高木, 1988, 深谷, 1986)。いじめの影響は、いじめられる状態を脱し、半年や1年時間が経過すれば容易に消失する一過的なものであろうか。いじめの長期的な影響を検討した研究が少なく、実情は明らかではない。本研究では、いじめが、いじめを受けた生徒にどのような長期的な影響を及ぼしているのか、その実態を明らかにすることを第二の目的とする。

最近の研究は、初期の学校生活において経験されたいじめは、その後成人した後までも持続的な影響を及ぼすことがあることを示唆している。例えば、Smith (1993) は、いじめはささいなできごとではないという。いじめを受けた子どもは、受けていない子どもの2〜3倍も特別の教育を必要とすることを明らかにしている。さらに、いじめが被害者に及ぼす長期的影響は明白であり、成人した後の生活をより抑鬱的なものとし、多くの人は、大人の関係を作り出すことに困難を感じていることを報告している。

また、立花 (1990) は、1978〜1988年までの10年間に大学病院の精神科に通院、あるいは入院した思春期の患者で、発病の契機や症状の形成に、学校での「いじめられ体験」が強く影響していると思われる症例を比較検討している。患者の平均年齢は16歳で、12歳〜21歳の幅はあるが、主に中学生から高校生を対象とした研究である。その結果、患者は身心症 (psychosomatic) レベルから神経症レベル、精神病レベルまでさまざまの症状を呈した。登校拒否はほとんどのケースで共通する症候ないしは現象であった。これらの症状は、身体症状を強く訴える患者を除くと、ほとんどのケースで、「いじめられ体験を契機にすぐ発症するものではなく、かなり長期間の潜伏期間を有し、またいじめがなくなっても長期間持続する」という特徴があった。

立花の研究では、症状の重いいじめられ体験者を対象としているが、通院する程までに至らないいじめ体験者であっても、本人はいじめの長期的な影響を自覚しているのかもしれない。そこで、本研究では、通院者だけでなく、通院経験のないいじめられ体験者をも考慮しながら、立花の研究対象よりもさらにいじめられ体験から、多くの年数が経過していると考えられる大学生を対象に、いじめの長期的影響が被害者によってどのように自覚されているのかを明らかにすることにする。

いじめの長期的な影響にはどのようなものが考えられるのであろうか。Janoff-Bulman & Frieze (1983) は、事故や犯罪などの被害者が示す反応について整理している。彼らによれば、心理学の文献においては、犠牲者は、何らかの身体的あるいは精神的逸失の結果として、日常的な生活様式を変化させられた人すべてであると定義されることが多いという。この定義によれば、犠牲者は、犯罪、性的暴行、自然災害、一時的あるいは慢性的病気、身体的な衰弱を招く事故などの結果、生活の変化を経験した個人が含まれる。そして、これらの被害者によって示される反応には、共通性があると考えられている。例えば、ショック、混乱、無気力、不安、抑鬱、自尊心の喪失、他者に対する嫌悪感等々を経験する。一方、Smithや立花の研究でも、いじめの被害者は、イライラ、対人恐怖、不安、抑鬱、不適応行動、など類似の反応を示している。こうした研究からすると、いじめの被害者は、いじめられ体験から長時間経過した場合でも、身体的、精神的影響を受けており、その影響は上述のさまざまな反応に反映するものと思われる。そしていじめの長期的効果は、いじめられ体験が厳しければ厳しいほど、各種の反応に強く反映すると予想できる。

なお、本研究では大学生を対象に調査を実施する。彼らの過去の「いじめられ体験」と、現在の心身の状態を明らかにしようと意図した背景には、既に述べた理由のほかに次の理由がある。①1980年代中頃から、「いじめられ体験」を主要な問題としていると思われる相談がいくつか見られるようになり、彼らの小学生・中学生・高校生期の「いじめられ体験」の実態を知る必要性を感じた。②今の大学生が小学生・中学生・高校生だった頃にいじめ問題が深刻化し、社会問題化してきた。③いじめ問題の渦中にあるときには、実情をありのままに表現することに困難があるのに対して、大学生となった現在、時間的・心理的に距離をおいて自己の体験を見ることができると思われる。それによって、かなり率直に「いじめられ体験」が表現されると期待される。④過去のいじめが、心身両面にその後どのような影響を及ぼしているかを明らかにする。

以上のことから、本研究では、次の二つの仮説を設定して吟味することにする。仮説1; いじめられる児童・

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

生徒が級友や教師に援助を求めることは、いじめの解消と強く関係しているであろう。仮説2; いじめの影響は一過的なものではなく、いじめられた児童・生徒の心身両面に長期的な影響を及ぼすであろう。そして、その影響は不安、抑鬱、対人関係への消極性などの反応として現れるだろう。

研　究　1

大学生を対象に、大学入学以前に体験したいじめの実態、およびその長期的影響について上述の仮説を検討する。

方　　法

調査対象

調査対象者は、埼玉大学の学生男子2,521名、女子1,394名、合計3,915名である。各調査対象者は、同大学の保健管理センターが実施する定期健康診断を受診するために同センターを訪れた学生である。なお、受診対象者は、男子3,365名、女子1,773名である。新入生、在校生、留年生、大学院生が含まれ、それぞれ教養学部、教育学部、経済学部、工学部、理学部、その他（政策科学研究科等）に所属している。

調査票の作成

全学の学生の精神保健の実態をできる限りよく把握するためには、全学部の学生を対象に、短時間に回答できる調査票を用意することが必要条件であると考えた。健康診断時の診断待機の間に実施できる必要最小限の質問項目を作成した。質問項目の作成にあたっては、単に心理学理論の観点だけでなく、保健管理上の必要性という実用的観点をも重視した。そこで、精神科医（全学の学生の精神疾患や不適応などの健康状態を継続的に診断・記録し、治療やカウンセリングを行っている専任担当医師）の提供する当センター受診者の経年資料や意見を取り入れ、学生の実態を反映する調査内容となるように配慮した。なお調査項目の決定は、担当医師と筆者の合意に基づいて行われた。

いじめられ体験の有無について、「はい」「いいえ」の二件法でたずねた。次に「いいえ」と回答したいじめられ体験のない学生には、自分自身が他の生徒をいじめた経験の有無について、「はい」「いいえ」の二件法で回答を求め調査を終了した。一方、「はい」と回答したいじめられ体験のある学生は、この質問への回答に先立って次の質問項目に回答した。いじめを受けた時期を明らかにするために、受けた時期を小学校、中学校、高等学校の3つに区分し、それぞれについておよそ何年生から何年生頃までかを記入させた。複数回答を認めた。

いじめがどのような方法・内容で行われたのかを明らかにするために次の選択肢を設け、当てはまるものすべてを選ばせた。なお、いじめの方法・内容は「言葉での脅し」「冷やかしからかい」「持ち物をかくす」「仲間はずれ」「集団による無視」「暴力を振るう」などに区分されている（文部省初等・中等教育局, 1987)。これらを参考に次の5つの選択肢を作成し、当てはまるものをすべて選ばせた。①暴力（身体的暴力・持っているものを壊されるなど)、②いやがらせ（ことばでのひやかしや悪口・しつこいふざけなど)、③仲間はずれ（無視・口をきかない・きたながるなど)、④脅迫的なさしず（使い走りをさせられる・嫌なことをやらされるなど)、⑤その他。その他を選択した場合には、その内容を具体的に記入できるように空欄を設けた。

いじめられたとき、本人がどのように対処したかを明らかにするために、次の6つの選択肢を用意し、あてはまるものをすべて選択させた。①何もしないでいじめられるままになっていた、②家族（父、母、兄、姉など）に相談した、③先生に相談した、④友人に相談して力をかしてもらった、⑤自分だけで反撃した、⑥その他。その他を選択した場合には、その内容を具体的に記入できるように空欄を設けた。

また、いじめに対する対処の結果、いじめがどのように変化したのかを明らかにするために次の5項目を設け、当てはまる項目を1つだけ選択させた。①前よりひどくなった、②変わらなかった、③少しよくなった、④かなりよくなった、⑤全くなくなった。

さらに、いじめられたことによって学校生活にどのような影響が表れたかを明らかにするために次の4つの選択肢を設け、あてはまる項目を1つだけ選択させた。①たいした影響を受けず、学校を休むことはなかった、②つらかったが、学校を休むほどにはならなかった、③つらくて時々（一週間くらい）学校を休むことがあった、④とてもつらくて、長い間（一カ月、あるいはそれ以上)、学校を休むことがあった。

以上は、主にいじめの態様・実態を明らかにするための質問である。

本研究の第2の目的であるいじめの長期的影響を明らかにするためには、被害者自身が大学生になった現在、いじめられ体験をしたことで、心身両面がどのように変化してきたと受けとめているかを調べることが必要であると考えた。

Damon & Hart (1982) は、人が自分自身を客観的対象として理解するときには、その内容は主に4つの異なるカテゴリーに分け得ることを示唆している。それは、身体的(physical)、活動的(active)、社会的(social)、心理的(psychological) の各カテゴリーである。いま、学生がいじめられたことによる心身の変化をどのように受けとめるかは、彼ないしは彼女らが自分自身の心身の状態をどのように理解しているかに関わる問題であると考えるなら、Damonらの自己理解の区分は、本研究に適用できるものである。立花(1990)の症例研究によれば、いじめの長期的な影響は、自己についての漠然とした全体的変化として経験されるだけでなく、身体的経験、社会的経験、心理的経験等、多様な面の変化として体験され自覚されている。いじめられることによって自己のある側面は強く影響されるが、他の側面はそれほど影響されないということが起こるかもしれない。このように、自己理解をカテゴリーに分けて分析することは、いじめの長期的影響による自己の変化を、多面的・ダイナミックに明らかにするのに有効な糸口を与えるものである。そこで、本研究では、前述の自己理解の4つのカテゴリーにそって、いじめの長期的影響を測定するための項目を10個用意した。その際、大学生活を送

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

Table 1　いじめに対する被害者の対処とその後のいじめの変化

対処（援助・相談）	無抵抗		家族・先生・両　者		友　人		家族・先生・友人すべて		自分で反　撃	
いじめの変化	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
悪化・無変化	110	54.8^{++}	44	35.8	17	20.5^{--}	7	21.2$^{-\#}$	84	29.3^{--}
よくなった	40	19.9^{--}	50	40.7^{+}	32	38.6	11	33.3	98	34.2
全くなくなった	51	25.4^{-}	29	23.6^{-}	34	41.0$^{+\#}$	15	45.5$^{+\#}$	105	36.6^{+}

（注）1.　無抵抗＝何もしないでいじめられるままになっていた.
家族・教師・両者＝家族（父・母・兄・姉など）に相談した場合，先生に相談した場合，あるいは両者に相談した場合.
友人＝友人に相談して力をかしてもらった.
家族・先生・友人すべて＝家族と先生と友人の三者すべてに相談した場合.
自分で反撃＝自分だけで反撃した.
2.　＋＋，＋，＋# はそれぞれ $p<.01, p<.05, p<.10$ で割合が大きかったことを，
－－，－，－# はそれぞれ $p<.01, p<.05, p<.10$ で割合が小さかったことを表す.

る上で、他者との関わりや心理的な状態が大きな位置を占めることを考慮して、社会的カテゴリーと心理的カテゴリーの項目を多くした。社会的カテゴリーと心理的カテゴリーの境界は明確ではないが、ここでは大まかに次の区別を念頭においた。前者は直接他者との関わりに関する内容、後者は他者との直接の関わりを前提にしない個人の日常の心理状態をとりあげる。なお、本研究は、自己理解の各カテゴリーの妥当性の検討を目的とするものではない。ⓐ身体的カテゴリー；①体に不調（不眠・疲労感など）を感じることが多くなった。ⓑ活動的カテゴリー；①勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった。ⓒ社会的カテゴリー；①人の態度に過敏になった。②相手の気持ちをよく考えるようになった。③人とのつき合いが消極的になった。ⓓ心理的カテゴリー；①自信がなくなった。②我慢づよくなった。③イライラしやすくなった。④気持ちが暗くなった。⑤負けず嫌いになった。いずれの項目も「全くあてはまらない(1)」、「少しあてはまる(2)」、「だいたいあてはまる(3)」、「とてもよくあてはまる」(4)の4点尺度で回答するように構成した。

以上の項目をまとめて1枚の調査票を作成した。

調査の実施

保健管理センターにおいて全学の学生を対象に行われる定期健康診断時に調査票を手渡し、調査の主旨説明と回答の依頼を行った。趣旨の説明には、次の教示を行った。『「いじめ」問題はなかなかあとをたちませんが、これは学校だけの問題ではなく、その社会の歪みを表わす現象でもあります。また、過去のいじめ体験が青年期にまで影響を及ぼす場合も少なくありません。いじめが個人に対して持つ影響を知るための糸口としてアンケート調査を行うことになりました。皆さんの過去のいじめ体験についてありのままふりかえっていただくことによって、いじめ問題の解決の手がかりを得たいと思います。皆さんのご協力を是非お願い致します。』回答は無記名で依頼し、個人を取り上げて問題にすることのない旨を伝えた。回答は診断待合時間にするよう要請し、了承者にその場で記入してもらい、記入直後に回収した。調査は、当保健管理センター名で実施した。

結果と考察

いじめられ体験の実態

いじめられ体験者は全体の 24.7%（968名）おり、男子の 21%（531名）、女子の 31%（437名）が何らかのいじめられ体験を持っている。女子の方が男子よりも 10% ほど体験率が高くなっているが、有意な性差は認められない。いじめられた時期についてみると、いじめられ体験者の 56.2% は小学校で、35.5% は中学校で体験している。高校でのいじめられ体験を持つ者は 2.9%であり、9割以上のいじめは小学校、中学校でおきている。

次にいじめの内容・方法について見ると、男子と女子で違いが認められる。性別に見ると、男子では「いやがらせ」(42.8%)、「暴力」(14.4%)、「仲間はずれ」(13.2%)、「いやがらせ」と「仲間はずれ」(8.4%)、「暴力」と「いやがらせ」(7.2%)、「暴力」と「いやがらせ」と「仲間はずれ」(3.7%)、「暴力」と「いやがらせ」と「仲間はずれ」と「脅迫的指図」(3.5%)の順になっている。女子では、「仲間はずれ」(39.4%)が最も多く、「いやがらせ」(26.2%)、「いやがらせ」と「仲間はずれ」(18.3%)、「暴力」と「いやがらせ」と「仲間はずれ」(3.3%)、「暴力」と「いやがらせ」(3.0%)、「暴力」(2.8%)の順になっている。いじめられたことによる苦痛によって一週間ないしは一カ月位休んだ人は、0.95%（37名）であった。

いじめに対する対処といじめの変化

いじめに対する被害者の対応は、いじめの解消とどのような関係があるのであろうか。仮説1で示した被害者の対処の有無や様式といじめの解消・未解消などの変化との関係を見るために、結果を整理したものがTable 1である。両者の関係を吟味するのに先立って、いじめに対する被害者の対処といじめの変化をそれぞれの選択肢の意味・内容を考慮して、次のようにカテゴ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

リー化した。まず、いじめに対する対処は、①「何もしないでいじめられるままになっていた」無抵抗群、②友人ではなく兄弟や異なる世代の大人である教師、親（家族）、あるいはその両者に援助を求めた教師・家族群、③同世代である友人に援助を求めた友人群、④家族と教師と友人の三者すべてに援助を求めた家族・教師・友人群、⑤一人で反撃した反撃群の５つに分類した。

一方、いじめの変化については、①いじめが変わらなかったり、一層ひどくなった場合、改善が認められない点で共通していることから、１つのカテゴリーにまとめて無変化・悪化群とした。また、②「少しよくなった」場合と、「かなりよくなった」場合は、改善が認められた点で共通していることから改善群として１つのカテゴリーにまとめた。さらに③完全にいじめがなくなった場合は解消群とした。

次に、これらのカテゴリー間の関係を見るためにいじめに対する対処(5)×いじめの変化(3)のχ^2検定を行った。その結果、いじめに対する対処とその後のいじめの変化との間には有意な関係が認められた（$\chi^2(8)=55.68$, $p<0.001$）。さらに残差分析を行なった（残差はdで表すことにする）。被害者が無抵抗の場合、いじめが変化せず一層ひどくなる割合は有意に大きく（$d=6.49$, $p<0.01$）、逆にいじめが改善（$d=-4.25$, $p<0.01$）、解消（$d=-2.43$, $p<0.05$）する割合は有意に小さかった。それに対して、一人で反撃した場合には、いじめが完全に解消する割合が有意に大きくなっている（$d=2.05$, $p<0.05$）。同時にこの対処の場合、いじめの無変化・悪化の割合は有意に小さかった（$d=-3.07$, $p<0.01$）。家族または教師、あるいはその両者に援助を求めた場合には、いじめが改善する割合が有意に大きくなる（$d=2.32$, $p<0.05$）。しかし、この対処をした場合、いじめが完全に解消する割合は逆に有意に小さかった（$d=-2.24$, $p<0.05$）。友人に援助を求めた場合、悪化・無変化の割合が有意に小さく（$d=-3.14$, $p<0.01$）、完全に解消する割合が大きくなる傾向が有意に近い水準で見られた（$d=1.82$, $p<0.10$）。家族と教師と友人の三者すべてに援助を求めた場合、悪化・無変化の割合が小さくなる傾向が有意に近い水準で見られ（$d=-1.82$, $p<0.10$）、逆に完全に解消する割合が大きくなる傾向が有意に近い水準で見られた（$d=1.67$, $p<0.10$）。

これらの結果は、家族や教師に援助を求めることと、その後のいじめの解消・未解消と強い関係があることを示しており、仮説を支持する結果である。なすがままになることは、いじめを悪化させるか、同じ状態を持続させることになる。一人で反撃する場合には、いじめが悪化したり、そのまま同じ状態が継続することは少なくなり、完全に解消する割合が大きくなる。このことからも、いじめを受けた当人の積極的な対応がいじめを抑える重要な方策の一つであるといえよう。しかし、そうした対応ができない場合に、周囲がどのように対処するかが重要な問題である。

家族や教師に援助を求めることは、いじめの事態を改善するのに役立つが、いじめが完全になくなる割合を小さくしている。それに対して、家族と教師に加えて友人に相談することは、いじめの悪化・無変化の割合を小さくすると同時に、いじめが完全になくなる割合を大きくする傾向がある。さらに、友人への相談は、いじめの悪化・無変化の割合を小さくし、完全な解消の割合を大きくする傾向が見られる。これらの結果は、いじめ事態を改善し、解消する要は友人であることを示唆するものかもしれない。

いじめが被害者に及ぼす長期的影響

いじめの長期的影響を明らかにするための10項目が、回答者にどのような意味・内容を持つものとして認知されているかを明らかにするために因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。固有値１以上を因子数決定の基準とし２因子を得た（各因子の寄与率は第１因子35.09%、第２因子21.92%である）。各因子への負荷量が0.55以上の項目を因子を代表するものとして採用すると、第１因子は「気持ちが暗くなった。（因子負荷量，0.83）」、「自信がなくなった。(0.75)」、「人とのつき合いが消極的になった。(0.75)」、「勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった。(0.73)」、「体に不調を感じることが多くなった。(0.66)」、「イライラしやすくなった。(0.63)」の項目群からなり、否定的な内容が共通している。それに対して、第２因子は「我慢強くなった。(0.79)」、「負けず嫌いになった。(0.78)」、「相手の気持ちをよく考えるようになった。(0.72)」、「人の態度に敏感になった。(0.55)」の項目群からなり、第１因子に比べて大旨積極的意味合いが強いものとして解釈できる。これらの項目は、心理的には二つのカテゴリーに分類し得ることがわかった。

ところで、本研究は、いじめられ体験が個人の心理的・身体的な面に及ぼす影響を総合的に把握するために、自己理解のカテゴリーを考慮して項目を作成した。その際調査実施の時間的制約等の点から項目数をできるだけ少な目にした。そのため、項目を積極、消極の二つの面に圧縮して分析することは、かえって被害者に及ぼすいじめの多様な影響に関する情報を極端に少なくしてしまうことになる。また、統計的に強い関連のある項目であっても、精神保健の観点からは区別して考えることによってより有益な情報が得られる場合がある。例えば、人とのつき合いに関する項目と、体調に関する項目は消極的な面を表す点では共通している。しかし一方は人間関係の側面に、他方は身体的生理的な側面に言及し異質なものである。

こうした理由から、本研究では、因子分析による二因子構造にはとらわれず、各カテゴリーの各項目ごとにいじめられ体験の長期的影響を分析することにする。

本調査対象者は大学生になった今、小学校、中学校、あるいは高等学校でのいじめられ体験によって、精神的・身体的にどのような影響を受けていると感じているのだろうか。ここでは、仮説２の吟味を行う。精神的・身体的な影響を見る主な従属測度は、既に説明した５つのカテゴリーからなる身体的・心理的内容に係わる10項目である。また、いじめられ体験の長期的影響の強さは、当時のいじめによる苦痛の程度によって大きく左右されることが予想される。そこで、分析に先立っていじめられ体験者が回想的に感じている当時の苦痛の大きさを基に、被害者を３つのグループに分類した。第１

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

Table 2　いじめを受けた当時の苦痛の大きさ別に見たいじめの長期的影響

	苦痛小群				苦痛中群				苦痛大群			
	男	N	女	N	男	N	女	N	男	N	女	N
体に不調（不眠・疲労など）を感じることが多くなった.# ***	1.15 (0.44)	265	1.12 (0.42)	a 188	1.53 (0.85)	186	1.37 (0.68)	b 178	2.15 (1.14)	13	1.77 (1.02)	c 22
自信がなくなった. ***	1.34 (0.62)	264	1.43 (0.73)	a 188	1.98 (0.99)	187	2.01 (1.03)	b 181	2.08 (1.04)	13	2.33 (1.32)	b 21
負けず嫌いになった. *	1.93 (1.11)	261	2.07 (1.14)	a 187	2.17 (1.16)	186	2.21 (1.19)	b 180	2.31 (1.18)	13	1.71 (1.19)	21
勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった.# ***	1.18 (0.47)	262	1.15 (0.46)	a 188	1.66 (0.98)	186	1.45 (0.81)	b 177	1.71 (0.91)	14	1.71 (1.06)	b 21
イライラしやすくなった. ***	1.36 (0.71)	263	1.30 (0.69)	a 186	1.92 (1.05)	185	1.78 (1.01)	b 175	1.86 (0.86)	14	1.68 (0.89)	b 22
人の態度に過敏になった.# ***	1.82 (0.95)	259	2.13 (1.11)	a 188	2.51 (1.01)	184	2.91 (1.02)	b 178	2.57 (1.02)	14	2.86 (1.15)	b 21
人の気もちをよく考えるようになった.# ***	2.00 (1.05)	264	2.14 (1.12)	a 185	2.59 (1.05)	186	2.79 (0.99)	b 179	2.43 (1.09)	14	2.71 (1.15)	b 21
気もちが暗くなった. ***	1.42 (0.75)	262	1.45 (0.79)	a 184	2.08 (1.05)	185	2.07 (1.10)	b 179	2.29 (0.99)	14	2.29 (1.35)	b 21
人とのつきあいが消極的になった. ***	1.44 (0.80)	262	1.47 (0.81)	a 186	2.10 (1.11)	186	2.06 (1.08)	b 178	2.21 (1.06)	14	2.00 (1.30)	b 21
我慢強くなった. ***	1.81 (1.00)	252	1.85 (1.02)	a 174	2.31 (1.07)	174	2.33 (1.08)	b 163	1.92 (1.00)	14	2.00 (1.05)	21

（注）1. a, b, cは，多重比較で異なる文字で表される群間に有意差が認められたことを示す ($p<.05$).
2. 項目の末尾にある*, ***は，それぞれ $p<.05$, $p<.0001$ で群間に差が認められたことを示す.
3. 項目の末尾にある#は，$p<.02$ で性差が認められたことを示す.
4. 数値は平均，（　）内は標準偏差を表す。評定は「全くあてはまらない (1)」から「とてもよくあてはまる (4)」までのレンジである.

のグループは、いじめられたが、それによってはたいした影響を受けず、学校を休むことがなかった被害者群である（苦痛小群と呼ぶ)。第2グループは、いじめによってつらい経験をしたが、学校を休むほどにはならなかった被害者群である（苦痛中群と呼ぶ)。第3グループは、いじめられ、それによって大きな苦痛を受け一週間ないしは1ケ月位学校を休むことがあった被害者群（苦痛大群と呼ぶ）である。

なお、いじめの長期的影響にどのような性差が生じるかを明示する資料はないが、いじめの内容や方法で男女間に差が認められることから、ここでは性差を独立変数の一つとして考慮することにする。

以上のことから、グループ (3) と性 (2) を独立変数、前述の10項目の各項目を従属変数として一般線形モデルに基づくグループ (3)×性 (2) の分散分析を行なった。各項目の平均と標準偏差をまとめたものが、Table 2 である。

身体的テゴリーでは、グループの主効果が有意であった ($F(2,846)=43.73$, $p<0.0001$)。交互作用は認められなかった。グループの多重比較を行なうと、苦痛大群が“体に不調（不眠・疲労感など）を感じることが多くなった”と回答する傾向が強く、次いで苦痛中群、苦痛小群の順になっている。いずれの群間にも有意な差が認められた。なお多重比較は有意水準を 5% に設定し、最小有意差を用いた検定を行なった。以後断わりのない場合、多重比較は同様に行なうことにする。性の主効果が認められ ($F(1,846)=5.35$, $p<0.02$)、女子より男子の方が体に不調を感じることが多くなったと評定する傾向が強い。

活動的カテゴリーではグループの主効果が有意であった ($F(2,842)=36.30$, $p<0.0001$)。交互作用は認められなかった。グループの多重比較を行なうと、苦痛中群と苦痛大群は苦痛小群に比べて“勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった。”と感じる傾向が有意に強い。また、性の主効果が有意であり ($F(1,842)=4.54$, $p<0.03$)、女子より男子の方に活動意欲が減退する傾向が強い。

社会的カテゴリーでは、すべての項目でグループの主効果が有意であった ($F(2,838)=53.92$, $p<0.0001$, $F(2,843)=34.67$, $p<0.0001$, $F(2,841)=44.51$, $p<0.0001$)。交互作用は認められなかった。各項目ごとにグループの多重比較を行なうと、苦痛中群と苦痛大群は苦痛小群に比べ、“人の態度に過敏になった”、“相手の気持ちをよく考えるようになった”、“人とのつき合いが

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

消極的になった”と感じる傾向が有意に強い。また、性の主効果が有意であり（$F(1,838)=24.05$, $p<0.0001$, $F(1,843)=5.40$, $p<0.02$）、男子より女子の方が人の態度に敏感になり、気持をよく考えるようになる傾向が強い。

心理的カテゴリーにおいても、すべての項目でグループの主効果が有意であった（$F(2,848)=59.01$, $p<0.0001$, $F(2,839)=38.16$, $p<0.0001$, $F(2,842)=3.11$, $p<0.04$, $F(2,792)=20.97$, $p<0.0001$, $F(2,839)=52.43$, $p<0.0001$）。交互作用は認められなかった。グループの多重比較を行なうと、次の項目では苦痛中群と苦痛大群は苦痛小群よりも評定値が有意に大きかった。すなわち、前者二群は後者よりも“自信がなくなった”“イライラしやすくなった”“気持ちが暗くなった”と感じている。また、次の二項目では苦痛中群と苦痛小群の間にのみ有意差が認められたつまり、前者は後者よりも“負けず嫌いになった”“我慢強くなった”と感じる傾向が有意に強い性の主効果は認められない。

このように、いじめを受けてから長期間を経た後でも、大学生は心理的・身体的に影響を受けていることが、本研究の結果から明らかになった。しかも、その影響は、いじめられ体験が強ければ強いほど、長期的な影響も強くなっている。いじめの渦中にいる被害者の苦痛が大きいことは当然のことであるが、その後長期にわたって影響が持続していることを見逃してはならない。

ところで、いじめられ体験そのものは、被害者自身でなければ実感することはできない。被害者はいじめを受けたときの辛さ、苦しさ、恥ずかしさ、孤独感等を身をもって体験するわけであるが、いじめられ体験のない人（以後無体験者と呼ぶ）は、自分の持つ既有の知識を動員することによって被害者の心理的・身体的状態を間接的に推測すると考えられる。それによって被害者の状態を判断することになる。このように、無体験者は、いじめによる被害者への心理的・身体的影響を知る手がかりが少ないことから、被害者に比べその影響を軽く見る傾向が強いかもしれない。いじめの影響についてのいじめられた当事者と無体験者の判断は明らかではなく、さらに検討すべき課題である。

研　究 2

心理的・身体的な面に対するいじめの影響についての被害者の自己認知と、無体験者の被害者に対する認知の違いを検討する。被害者は当事者として自分の置かれた状況やそれまでの経過、さらに他者には知りえないいじめによる心理的・身体的な状態の変化についての情報を豊富に持つ。それに対して、無体験者はそうした情報を欠いたまま被害者への長期的な影響を推測しなければならない。心身両面のつらさを体験していない分だけ、無体験者は被害者よりもいじめの長期的な影響を小さく見積もることが予想される。いいかえれば、苦痛を身をもって経験している被害者は、自己認知及び他の被害者認知において、無体験者よりもいじめの長期的な影響をよく知っており、強く評定するであろう。研究 2 ではこの点についての吟味を行う。なお研究 1 と同様、性差については探索的な検討を試みる。

方　法

調査対象

埼玉大学の学生男子 2,521 名、女子 1,394 名（いじめられ体験者の自己評定資料であり、研究 1 と同一である）、および芝浦工業大と千葉大学の学生男子 174 名、女子 162 名、合計 4,251 名である.

調査票の作成

いじめられ体験者と無体験者双方による他の被害者へのいじめによる長期的影響を測定するための質問紙を作成した。質問と質問項目・選択肢は、以下の点を除いて研究 1 と同一である。①新たに「あなたのまわりにはよくいじめられる人がいましたか？」という質問を設けた。回答は、「はい」か「いいえ」で回答させ、「はい」と答えた場合、最もひどいいじめだったと思うものについて研究 1 と同様の各質問に回答させた。「いいえ」と回答した場合、自分自身で他の人をいじめた経験があるかないかに関する質問に回答させ調査を終了した。②研究 1 で用いたいじめの長期的影響測定項目 10 項目を、次のように教示を変えて用いた。「いじめを経験したことで、その後その人自身が変化してきたと思うことはありますか。次の各項目について自分の感じていることに最もよく当てはまる番号に○印をつけてください。」各項目は、「全くあてはまらない (1)」から「とてもよくあてはまる (4)」までの 4 点尺度である。

以上の質問をまとめて 1 枚の調査票を作成した。

調査の実施

埼玉大学の調査対象と資料は研究 1 と同一である。芝浦工業大学と千葉大学の学生については、正規の授業時間の一部で集団調査を実施した。なお、調査に先立って行った教示は研究 1 と同様である。

結果と考察

分析のためのグループ分け

分析を行うにあたって、回答者を次の 3 群に分類した。①被害者-自己評定群；いじめを受けその苦痛から学校を一週間以上休んだ学生から成り、自己評定を行う（研究 1 と同一資料）。②被害者-他被害者評定群；いじめられ体験のある学生である。この中には、いじめを受けたが「たいした影響を受けず、学校を休むこともなかった」者から、「とてもつらくて長い間（1 カ月、あるいはそれ以上）学校を休むことがあった」者まで含まれる。したがって、被害者-自己評定群に比べいじめによる苦痛は小さい群である。他の被害者について評定する。③無体験者-被害者評定群；いじめられ体験を持たない学生である。これも他の被害者について評定する。

評定対象の選定

いじめの長期的影響に関する被害者の自己認知、他者認知といじめ無体験者の被害者認知の違いを明らかにするためには、同一のいじめ場面に同時に居合わせた被害者と無体験者を取り上げ、両者を比較することが最も直接的な方法である。しかし、実験的に事態を作り出したり、統制することは現実的に不可能であることから、ここでは間接的な方法で確認することにする。したがって本研究では、被害者と無体験者が同一の事態を体験し目

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

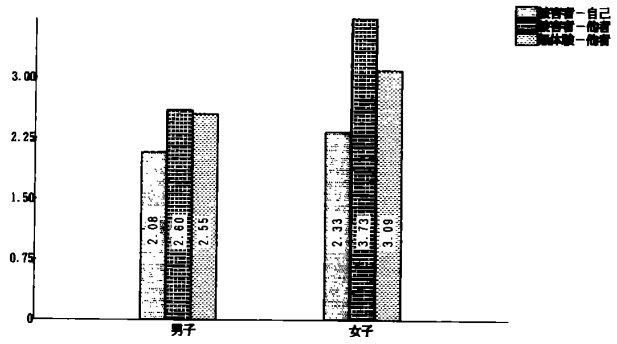

Fig. 1 「自信がなくなった.」の項目の男女の評定差
（注）1. 評定値レンジは，“全くあてはまらない(1)”から“とてもよくあてはまる(4)”.
2. 縦軸は評定値の大きさを表す.

撃していることを前提条件とはしない。しかし、両者の認知差を問題にするならば、少なくとも両者の評定対象者のいじめを受けた当時の精神的・身体的苦痛をできるだけ同一水準になるよう何らかの基準に基づいて統制する必要がある。そこで、評定対象者のいじめを受けた当時の精神的・身体的苦痛を測る指標として、いじめによる苦痛から学校を休んだか否かを用いることにした。自己評定を行ういじめられ体験者（被害者−自己評定群）については、いじめによって一週間以上学校を休んだ学生だけを選んだ。その内訳は、「つらくて時々（一週間くらい）学校を休むことがあった」学生37名と「とてもつらくて長い間（一カ月くらい）学校を休むことがあった」学生8名である。9〜10名は回答していない項目があり、集計結果の人数は45名以下になっている。他の二群に関してもこの基準に合わせ、一週間以上学校を休んだ被害者について回答した学生だけを抽出した。被害者−他被害者評定群では、一週間くらい休んだ評定対象被害者11名、一カ月くらい休んだ評定対象被害者6名であった。無体験者−被害者評定群では、それぞれ16名と7名であった。上記三群の評定対象者について、学校を休んだ期間の分布に違いが認められるか否かを吟味した。3(被害者−自己評定群、被害者−他被害者評定群、無体験者−被害者評定群)×2(一週間くらい不登校、一か月以上不登校）のχ^2検定を行った結果、両変数間に有意な関係は認められなかった($\chi^2(2)=2.59$, n.s.)。

被害者の自己認知・他者認知と無経験者の被害者認知

性(2)×グループ(3)の一般線形モデルに基づく分散分析を行った。従属変数は、いじめによる長期的影響を測定するための10項目それぞれである。性×グループの交互作用はいずれの項目においても有意ではなかった。また、性差については、心理的カテゴリーの“自信がなくなった”で有意差が認められ($F(1,66)=3.95$, $p<0.05$)、男子より女子の方が自信喪失の傾向が強かった(Fig. 1)。それ以外に性差は認められなかった。そこで、性を考慮せず、グループ別に各項目について平均値と標準偏差を算出しまとめたものが Table 3 である。カテゴリー別、項目別にグループ間の評定の違いを見ることにする。

身体的カテゴリーでは有意なグループの主効果が認められた($F(2,66)=3.16$, $p<0.05$)。多重比較を行うと、無経験者−被害者評定群の方が、被害者−自己評定群より“体に不調を感じることが多くなった”と評定する傾向が強い。

活動的カテゴリーでは、有意なグループの主効果が認められた($F(2,67)=8.59$, $p<0.0005$)。多重比較の結果、被害者−他被害者評定群および無体験者−被害者評定群の方が被害者−自己評定群よりも“勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった”と評定する傾向が有意に強かった。前者二群間に差は認められない。

社会的カテゴリーでは、“人とのつきあいが消極的になった”の項目でグループの主効果が有意であった($F(2,66)=9.65$, $p<0.0002$)。多重比較の結果、被害者−他被害者評定群と無体験者−被害者評定群の方が、被害者−自己評定群よりも“消極的になった”と評定する傾向が有意に強かった。

心理的カテゴリーでは、“自信がなくなった”の項目で有意なグループの主効果が認められた($F(2,66)=6.10$, $p<0.05$)。多重比較をすると、被害者−他被害者評定群の方が被害者−自己評定群よりも、“自信がなくなった”と評定する傾向が有意に強かった。また、“負けず嫌いになった”の項目で、有意なグループの主効果が認められた($F(2,66)=3.21$, $p<0.05$)。多重比較の結果、被害者−他被害者評定群の方が無体験者−被害者評定群よりも“負けず嫌いになった”と評定する傾向が強いことがわかる。さらに、“気持が暗くなった”の項目で有意なグループの主効果が認められた($F(2,67)=12.97$, $p<0.0001$)。多重比較の結果、被害者−他被害者評定群と無体験者−被害者評定群の方が、被害者自己評定群よりも“暗くなった”と評定する傾向が有意に強かった。

なお、“イライラしやすくなった”と“人の気もちをよく考えるようになった”の二項目で境界的な有意水準でグループの主効果が見られた($F(2,67)=2.72$, $p<0.07$, $F(2,67)=2.60$, $p<0.08$)。多重比較を行うと、前者の項目では被害者−他被害者評定群の方が被害者−自己評定群よりも“イライラしやすくなった”と評定する傾向が強い。後者の項目では、被害者−自己評定群と被害者−他被害者評定群は共に無体験者−被害者評定群より、“人の気もちをよく考えるようになった”と評定する傾向が強い。

当初苦痛を直接体験している被害者−自己評定群は、無体験者−被害者評定群よりもいじめの長期的影響を強く評定すると仮定したが、予想に反して前者は後者より有意に弱く評定することが多かった。したがって、被害者である当事者は第三者が見るより、長期的な影響は小さいと見ていることになり予測は支持されなかった。ところが、被害者による他の被害者評定も自己評定と同様に低くなっているかといえば、そうなってはいない。被害者は、自らに対するよりも他の被害者に対するいじめの長期的影響の方が大きいと見ている。しかし、無体験者の評定と大きく異なることはなかった。被害者は、他の被害者のいじめられ体験の長期的影響を無体験者より大きいと見るという仮定は、“負けず嫌いになった”“相

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

Table 3　いじめが被害者に及ぼす長期的影響ついての被害者の自己評定・他者評定と無体験者による他被害者の評定

評定者 / 項　目	被害者の自己評定		N	被害者の他者評定		N	無体験者による他被害者の評定		N
体に不調（不眠・疲労感など）を感じることが多くなった．*	1.91[a]	(1.07)	35	2.44	(0.89)	16	2.57[b]	(0.98)	21
自信がなくなった．**	2.24[a]	(1.21)	34	3.34[b]	(0.89)	16	2.82	(1.10)	22
負けず嫌いになった．*	1.94	(1.20)	34	2.25[a]	(1.06)	16	1.45[b]	(0.80)	22
勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった．***	1.71[a]	(0.99)	35	3.00[b]	(1.03)	16	2.50[b]	(1.22)	22
イライラしやすくなった．†	1.75[a]	(0.87)	36	2.38[b]	(0.81)	16	1.95	(0.97)	21
人の態度に過敏になった．	2.74	(1.09)	35	3.25	(1.18)	16	3.00	(0.98)	22
相手の気もちをよく考えるようになった．†	2.60[a]	(1.12)	35	2.75[a]	(1.06)	16	2.00[b]	(0.98)	22
気もちが暗くなった．***	2.29[a]	(1.20)	35	3.75[b]	(0.77)	16	3.32[b]	(0.89)	22
人とのつきあいが消極的になった．***	2.09[a]	(1.20)	35	3.19[b]	(1.04)	16	3.29[b]	(0.96)	21
我慢強くなった．	1.97	(1.01)	35	2.38	(0.81)	16	2.00	(1.00)	21

（注）1. 数値は平均，（　）内は標準偏差を表す。評定は“全くあてはまらない (1)”から“とてもよくあてはまる (4)”までのレンジである。

2. 各項目の末尾にある †, *, **, *** は，それぞれ $p<.08$, $p<.05$, $p<.01$, $p<.001$ で評定者間に差が認められたことを示す。

3. [a, b] は，多重比較で異なる文字で表される評定者間で差が認められたことを表す ($p<.05$).

手の気持ちをよく考えるようになった”の二項目で支持されただけであった。

討　　論

いじめ問題をどのように理解し、解決するかは難しい問題である。このことは、文部省が1989年以来二度目のいじめ対策を求める通知を、1994年12月に各都道府県教育長宛に出さざるをえなかったことによく表れている。本研究では、被害者にいじめに対する対応とその後の変化との関連を問うた。したがって、本人の主観的な判断とはいえ、対処といじめのその後の変化との間には因果的な関係が反映すると考えられる。結果は、いじめられる被害者が孤立状態を脱することが，解決への一つの重要な鍵になっていることを示唆している。友人への相談はいじめを完全に解消させる傾向があり、悪化させることも有意に少なくなっている。一方、友人ではなく、家族や教師への相談では、いじめ事態の改善には効果があっても、いじめを完全になくすことはかえって少なくなってしまう。教師や、家族への相談では、目につきやすい表だったひどいいじめは姿を消したとしても、潜行した形で残ることを意味しているのかもしれない。ところが、家族や教師への相談にさらに友人への相談が加わった場合を見ると、いじめの悪化は少なく、逆に完全な解消が多くなる傾向が見られる。これらの結果は、特に友人に援助者としていじめ事態に関わるよう要請するか否かが，いじめの完全解消に大きな意味を持つことを示唆すると考えられる。

他者に援助を求めることもさることながら、最も一貫した明確な結果の一つは、いじめられる当事者の対応といじめの関係である。たとえ被害者一人であっても反撃するなどの積極的な対応をすると、いじめが完全に解消する割合が大きくなり、いじめがひどくなる割合は小さくなる。それに対して、されるがままになっている場合にはそれぞれの割合は全く逆になり、前者は小さく後者は大きくなる。これは、対抗する意欲のない者に対しては、いじめる側が執拗につきまとうことを示唆する資料といえる。当事者個人が反撃しないことが問題というよりも、反撃できない孤立状態が生み出される集団状況こ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

そ明らかにすべき問題になるが、本研究の範囲を越えるので今後の課題としたい。

いじめの事態が解消したとしても、いったん受けたいじめが被害者に与える影響は，簡単に消失するものではない。こうした予測を裏づける結果が得られた。今までいじめの長期的な影響についてはあまり指摘されてこなかった。しかし、結果を見ると、学校を休むまでには至らないにもかかわらず、つらい思いを体験した学生は、ほとんどの項目で学校を休むほど厳しい体験をした学生と同水準の長期的影響を受けていると答えている。苦痛中群と苦痛大群では、過半数の項目で評定平均値が2.00以上になっており、いずれの群の学生にもいじめによる持続的な影響があることがわかる。ただ、身体的カテゴリーである体調に関する項目では、苦痛大群の体調不調を感じる傾向が他の二群より有意に強く、さらに苦痛中群は、小群より有意にその傾向が強くなっている。いじめによる苦痛の大きさに対応して体調の不調の程度も大きくなっていることから、体調は苦痛の大きさを最も敏感に反映するものの一つかもしれない。

いじめられ体験は、本人にとってすべて否定的な影響しか与えていないと受けとめられているかといえば、必ずしもそうではないようである。人の気持ちをよく考えるようになったことなどは、被害者自身の苦しい体験の中から共感性を高めた結果ともいえよう。負けず嫌いになったり、我慢強くなることなどは、好ましい変化とばかりはいえないかもしれないが、逆境にも負けないという積極的な意味を見出そうとする被害者の心理の表れかもしれない。

Smithや立花の指摘と同様に、いじめは長期にわたって被害者に影響を及ぼすことがわかった。当事者である被害者は、こうした影響をつぶさに知っており、無体験者がその被害を推測する以上に強く認知すると予測した。しかし、結果は逆の傾向を示し、被害者は無体験者に比べ長期的影響を小さく見積る傾向が強かった。こうした結果が生じた原因はいくつか考えられる。①いじめられ状態から脱してからすでに長時間が経過し、実際にいじめによる影響は小さくなっている。あるいは、②いじめられ状態に耐え、苦境を克服してきたという思いがあり、いじめの影響を小さく見積る。③今でも強い影響を受けていると認めることは、現在の自分に脅威を与えることになることから、防衛傾向が強まり、影響を小さく見積るなどである。

ところで、被害者が、いじめの影響は時間の経過とともに小さくなることを体験的に知っているとすると、自己評定と同様に他の被害者についての評定においても、類似の評定傾向が見られるはずである。しかし、一方では他の被害者についての評定は、自己評定に比べて有意に大きくなっており、他方では無体験者の評定とは多くの項目で差が認められなかった。こうしたことから、被害者は、自己認知において特徴的な傾向を示している可能性が高いと考えられる。

自己認知と他者認知の違いという観点から見ると、帰属研究で明らかにされてきた、当事者の自己評定においては内部要因を小さく認知し、他者評定においては当人の内部要因を重視するという、行為者と観察者の帰属の違い (Jones & Nisbett, 1977) や、根本的な帰属の錯誤 (Ross, 1977) と共通する傾向なのかもしれない。つまり、帰属に限らず当事者は、自己の内的状態を小さく見、他者の内的状態を大きく見る傾向が強いのかもしれない。しかし、こうした傾向が被害者による他の被害者の認知のすべての場合にあてはまるわけではない。それほど結果は単純ではない。一面では、予想通り、いじめを体験した被害者は、無体験者より他の被害者に対して、“自信がなくなった”“相手の気持ちを考えるようになった”と推定する傾向が有意に強くなっているのである。

いじめられ体験は、複雑な形で被害者の心身の状態及び自己認知–他者認知の両面に長期的影響を及ぼしていることに注目しなければならない。

さらに、本研究では試行的な検討であるが、身体的カテゴリーと、活動的カテゴリーでは女子より男子にいじめの影響が強く現われ、社会的カテゴリーでは、逆に男子より女子に影響が強く現われている。長期的影響の出方に性差があることや、影響の性差は，男女のいじめの内容の違いを反映する可能性が示唆されている点にも注意する必要がある。影響の違いによっては、被害者に対する治療的関与の仕方が異なるかもしれないからである。

引用文献

Damon, W. & Hart, D., 1982, The development of self-understanding from infancy through adolescence. *Child Development*, **53**, 841–864.

深谷和子，1986，調査レポートII　中学生の「いじめ」　現代のいじめ　現代のエスプリ，**228**, 44–56.

Janoff-Bulman, R. & Frieze, I. H., 1983, A theoretical perspective for understanding reactions to victimization. *Journal of Social Issues*, **39**, 1–17.

Jones, E. E. & Nisbett, R. E., 1977, The actor and obsever: divergent perceptions of the causes of behavior. In E. E. Jones, D. Kanouse, H. Kelley, R. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, N. J.: General Learning Press.

亀田　稔・亀田愛子，1990，『流れ星が見たい』筑摩書房.

金　賛汀，1981，『ある「いじめられっ子」の自殺—遺書のない自殺—』一光社.

金　賛汀，1983，続『ぼくもう我慢できないよ—「いじめらっれ子」の自殺・その後—』一光社.

金　賛汀，1984，『ぼくもう我慢できないよ』一光社.

文部省初等・中等教育局，1987，「児童生徒の問題行動の実態と文部省の施策について」(日本総合愛育研究所編　1989『日本子ども資料年鑑』).

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

文部省初等・中等教育局，1993，「児童生徒の問題行動の実態と文部省の施策について」（日本総合愛育研究所編　1994『日本子ども資料年鑑』）.

森田洋司，1985，いまいじめが広がっている PHP 特別編集号『いじめっ子・いじめられっ子』PHP 研究所，pp. 6–32.

Ross, L., 1977, The intuitive psychologist and his short-comings: Distortions in the attribution process. In Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 10. pp. 173–220, Academic Press.

Smith, P., 1993, Bullying 'has long-term effect on victims'. *Daily Yomiuri*: October 3rd.

立花正一，1990，「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について．精神神経学雑誌，**92**, 321–342.

竹村和久・高木　修，1988，“いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調形成—，教育心理学研究，**36**, 57–62.

詫摩武俊，1985，いじめっ子・いじめられっ子をなくす育て方．PHP 特別編集号『いじめっ子・いじめられっ子』PHP 研究所，pp. 33–59.

土屋　怜・土屋　守，1993，『私のいじめられ日記』青弓社.

（1994 年 7 月 18 日受稿，1995 年 6 月 29 日掲載決定）

NII-Electronic Library Service